

mfikmyhk CREATURE MIXING 1 **Cinderella**

cover 倉崎天一
comic Lagado
novel 川鵜鷄肋, Fukapon

この本は

姉さま達はお城に行ってしまった、

…お城ってどんなところなのかな

とゆー頭痛でできています。

CONTENTS

この本ご説明イラスト	倉崎天一	01
Aschenbawerferin	川鶴鶏肋	03
呪目、法廷に絶つ	Lagado	19
はびえすと☆そーされず	Fukapon	23
締め切り前の呻き		42

mnfikmyhk
CREATURE MIXING 1
Cinderella

Aschenbewaterferin

川鶉鷄肋

「皆ありがとう。これほど多くの方々に誕生日を祝っていただけるとは光栄のきわみです」

大広間を埋め尽くした盛装の人々に、にこやかな笑顔で手を振る皇太子ではあったが、外面とは裏腹に彼の機嫌は優れなかった。

家柄にも容姿にもこれ以上もないほど恵まれ、学問にも武芸にも優れた彼の存在は、帝国の盤石の未来を人々に信じさせるに十分であった。しかしなかなか身を固めようとしていない彼に気を揉む者達もまた多かったのである。

無論、近隣の国々から縁談が持ち込まれる事もたびたびあったが、ろくに面識もない世間知らずの姫を妃とするつもりなど彼には毛頭無かった。

皇太子は笑顔を貼り付けたまま、心でひっそりため息をついた。

皇帝夫妻が大々的に開いた誕生パーティーには着飾った若い娘の姿がいやに目立ち、これが妃探しの隠れ蓑であることは疑うべくもない。

つまり、集まった娘達の誰一人として彼の心を動かすことはなかったという事だ。帝国を受け継ぐ者としてふさわしいだけの高い目標を自らに課している彼にとっては、配偶者に求める理想も相応に高いものであったからだ。

やがて、楽団の演奏する軽快な音楽にあわせ、幾組もの男女がそれぞれペアを組んでダンスを踊りはじめた。しかしパーティーの最高潮であるはずの舞踏会も、本来主役である太子が自ら壁の花を決め込んでいるようでは些か盛り上がり欠けるものとなったのは当然であつたらう。

このような場で女性の方から男性に声を掛けるのは本来マナー違反であるが、ここでは密かにそれが期待されていた（あの皇帝のことだ、「見事皇太子を落として見せよ」と密かに命令を発していてもおかしくはない）。とはいえ、淑女として育てられた娘であれば気後れるのも当然であるし、相手がこの完璧な皇太子であればなおさらだった。

冷たく厳しく近寄りがたい。太子自身、意識してそのような雰囲気をもとうことで、つとめて娘達を近寄らせないようにしていた。

壁にもたれて腕を組み目を閉じる。戦場に身を置いたつもりとなる。それだけで十分だった。

そのまま半時も経ったときだろうか。

扉の開く音。ざわつく空気。一つ、また一つと楽器が欠け落ちていき、ついには音楽が止まった。

反射的に腰に手をやりかけた太子であったが、今まさに舞踏会の最中であつた事を思い出して苦笑する。こんなところで一

体何が起こるというのだ。

「騒がしいな。どうしたのだ、クラウス？」

お付きの男、クラウスは問いに答えなかった。いや、彼にはそもそも太子の声が聞こえていなかった。

彼はちょうど広間に入ってきた一人の娘に目を奪われていたところであり、実際には太子以外の全員が同じ状況であった。

その娘が身にまとっていたのはふくらみの少ない簡素な細身のドレスに過ぎなかったし、髪は結び上げる事もなく垂らしている。飾りらしい飾りと言え、髪に挿した百合の花一輪のみ。このような場では無礼とさえ言える姿であるが、完璧な立ち居振る舞いもあつて、誰も咎め立てようという者は居なかった。

実際、この地味な装いは彼女の魅力をいささかも損なうものではなく、むしろ清楚可憐さを増幅していたと言える。端的に言ってしまうと、その娘は豪華なドレスと宝石で着飾った娘達の中にあつてはおらずに抜けて美しく魅力的であり、一瞬にして広間の全員が魅了されたのも無理無いことであつた。

「あの娘が何だというのだ？」

約一名、皇太子殿下は心を動かされなかった模様であつた。

踊っていたペア達が脇により、娘に道を開けた。誘われるように太子へと歩み寄ってきた娘はスカートをつまんで優雅にお辞儀をすると、につこり微笑みかけた。

「初めまして。皇太子殿下でいらっしゃいますね？」

「その通りだよ、初めまして」

とりあえず儀礼的に答えた皇太子であつたが、娘の態度にい

ささか引つ掛かるところがあつて尋ねてみた。

「しかしよく分かつたね。僕の顔はさほど広くは知られていないはずだし、少なくとも君とは初対面だが」

「それはまた、貴族のお嬢方全員の顔をご存じのようなお言葉ですが…どうやら、全ての娘は殿下と踊りたがるものと思われているようです」

「…」

太子が遅ればせながら娘に興味を覚えたのはこの瞬間だった。

初めてまともに顔を見る。確かに美しい。

だが世界は広い。この娘程度に美しい女性ならいくらでもいるだろう。

太子が本当に希有なものと感じたのは、娘の瞳に宿る知性の光であつた。

「私と踊りたくないと仰るお嬢さん、よろしければお名前をきかせていただけますか？」

「では私もちよつと意地悪を…そうですね、アッシュカバード灰被り^{グレイ}とでもお呼びいただければ」

「では灰被り嬢。私と踊っていただけますか？」

「音楽無しでよろしいのですたら、是非」

聞き耳を立てていたクラウスが楽団員達の元に走り、いささか慌てた調子で曲が再開される。

自然にこみ上げてくる笑いに、太子は体を二つに折つて爆笑した。

「で、殿下が…」

「笑われておられる」

ようやく発作の収まった太子は、うやうやしく手を差し出した。

「このような荒れた手をお預けして、申し訳ございません」

「それは、僕とて似たようなものです」

半ば強引に娘の手を取り、皇太子は広間の真ん中に進み出た。初めてのペアとは思えない完璧に息のあったダンスを踊る美男美女。それは一枚の絵画のように完璧な美しさで、人々の目とため息を一身に集めた。

「そのドレスはちよつと変わった意匠ですが、もしやお手製かな？」

「これは、何もかも失ってしまった私を哀れんだ親切な妖精さん達が下さったものです」

「あくまでもはぐらかそうというのですかね、君という人は」
一曲が終わると、太子はクラウスを呼んで、耳打ちした。

「ポーランの『銀狼と踊り子』を頼めるか」

「え？『銀狼』で舞踏ですか？…いえ、ぎよ、御意」
続いての曲はひどくアップテンポのものになった。

広場のそこかしこでつまずきよろめくペアが続出する中、太子と娘だけは難曲を最後まで完璧に踊りきつてみせ、満場の喝采を浴びた。

一息入れるため、二人は壁際へと下がった。

あわよくば彼らの次のパートナーとなるべく幾人もの男女が様子を伺うが、皇太子の周りには立派な体格の騎士達が人垣をつくっており、近づく者達をやんわりと退ける。とても近寄れ

るような雰囲気ではない。

「よくついてこられたね。息も切らさないのだから大したものだ」

娘は微苦笑を浮かべる。

「…体を動かすのには慣れておりますから」

「いやいや、ダンスも実に堂に入ったものですよ。複雑なステップに変えてもすぐに合わせられる。これは、お父母上の薫陶の賜物かな？」

すつと眉を伏せ、娘は囁くような小声で答えた。

「父が私から受け継いだわずかなものの一つがダンスです。母から学んだ事はさほど多くはありません」

「…では、ご両親は？」

娘は俯いたままかぶりを振る。

「ともに亡くなりました。今は義母と義姉達^{あね}のところでご厄介になる身です」

「それにしても今宵は一人でいらしたようですが」

「お察し下さい……いえ殿下、誤解なさらないでください。あの方々には本当に感謝しているのです。今となつては何の縁もない私に寝る場所と日々の糧を与えていただけるだけなのですから。それ以上を望んでは罪というものなのです」

「さては、妖精のご助力があつたかな？」

重くなった空気を吹き飛ばそうとするかのように、皇太子は悪戯っぽく笑つてみせた。

「君にドレスをくれたばかりか、不思議な魔法の力でカボチャを馬車に、ネズミを馬と御者に変えてここまで送つてきてくれ

たと、そういうわけだ」

「はい。その通りです」

ようやく顔を上げ満面の笑みを返した娘に、皇太子は満足げに頷く。

「その妖精達には感謝せねば。おかげで予想外に楽しい時を過ごすことができたのだから。ネズミの御者殿にも一度お目に掛かっておきたいところだね」

「そんなことをなさっては、畏れ多さのあまり壁の穴に隠れてしまします。妖精さんもネズミさんも、美味しいお菓子なりもらえればそれで十分と申しておりましたから」

「おみやげなら包ませますよ。好きなだけ持つていくといい」

皇太子が騎士の一人を呼び寄せ、囁く。

「シンディー嬢がお帰りの時にネズミの御者殿に持たせて上げてくれ……ああ、ちょうど曲が終わりましたね。もう一曲つきあつていただけますか？」

「いいえ、残念ですがそれはできません」

ちらと大時計を見上げ、娘は即答した。

「いや、お疲れなら踊ってくれなくともよいのです。宴はまだあと二時間は続くのですからね。このままお話を続けて下さればそれで十分です」

「殿下のお言葉ですが、それも叶わぬ身なのです。わたくしも大変楽しい時を過ごさせていただきましたが、そろそろ妖精に言われた制限。魔法が切れてしまう前にお暇せねばなりません」

「なるほど、それでは仕方ない。では来月、母上の誕生日パーティーでお目に掛かりましょう」

揺るがぬ騎士達に僅かではあるが動揺が走った。皇太子があとさり言った言葉には、妃の候補として紹介する、という含みがあったからだ。

「いいえ」

娘は首を横に振り、太子に背を向けた。

「この灰被りは十二時をこえては続かぬ今宵一夜限りの夢とご承知下さい」

壁を向いたまま、娘は続ける。

「まるでもう会えぬかのような口ぶりですね。僕としてはこれからも親密におつきあいをさせていただきたいと思っているのですか」

さも心外といった様子で、太子。

「例えもう一度お目にかかれたとしても、魔法の助けを借りずに殿下のお眼鏡にかなうことはございませんでしょう」

「それは馬鹿な事を仰りますな。灰被り嬢のような娘がそう思うどこにでもいるはずがない。ええ、見つけ出して見えますとも」

「私にとってはほとんど目のない賭けです。まず間違いなく破れることがわかってなお希望を持つなど出来ません。ですが殿下が本当の私を知ってなお、それでも私を望まれるのですしたら……その時は喜んでお言葉に従うことを約束いたします」

「承知しました。ではまたお会いいたしましょう」

十二時を告げる鐘が鳴る中、灰被りと呼ばれた娘はそれ以上答えることも振り向くこともなく、再び人の海を割って広間を退出していった。

大扉をくぐる娘の背から目を離さぬまま、皇太子が二度手を打った。

「はい」

数秒とおかず、柱の陰から声が返る。

「あの娘を追跡するのと並行して他の追跡者を排除しろ。

二十、いや三十人使って構わない。前者は容易な仕事だろうが、同時にこなすことが困難であれば後者を優先しろ」

「御意」

続いて、皇太子は国の重鎮達が集まっている皇帝夫妻の傍らへと向かった。

「おお、盛り上がっていたようではないか」

「実に愛らしい娘さんではなくて？」

「父上母上のご感想は後でゆっくり聞いて差し上げますので今はお黙り下さい」

「…なんと、無愛想な息子よのう」

「照れているのですよ」

にやにや笑いを浮かべて食い下がってくる最高権力者夫妻を完全に無視して、太子はすぐに本題に入った。

「ヒューザー卿はいらっしゃるか？」

「ここに、殿下」

立派な髭を備えた老紳士が進み出る。

「今から言う条件を満たす人物がいなかったか、記録を確認してもらいたいです。良家と言える家柄で舞踏の達人、三、四年ほど前におそらく火事で屋敷と妻を失われ、その後子連れの未亡人と再婚。現在は故人だがご存命なら四十前後か。再婚後

の屋敷はこの城から馬車で一時間以内にあるはず」

「それでしたら、調べるまでもございません」

老紳士は顔色も変えず即答する。

「ほう、さすがは生き字引と呼ばれるだけの事はあります。あるいはアンサルド卿の管轄かとも思ったのですが」

「それはヘンネンからロサニア方面の外交に長らく尽力されたエドモンド・ノラート卿の事でしよう。皇妃様の遠縁に当たる、殿下とよく似た雰囲気のお方でした」

ヒューザーは瞑目すると、記憶をたぐるかのように言葉を続ける。

「ああ、そういえば、ノラート卿には確かに娘が一人いらつしやったはず。名をエリン、いやエレナ、そう、エレナと言いましたかな」

「ありがとうございます。その方に娘がいるとまでは存じませんでした。助かります……重鎮の皆様におかれましては、他言無用でお願いします。おかしな真似をやらされた向きには、容赦なく斬り捨てますのでどうかよろしく御自重のほどを」

震え上がる一同に、皇帝がダメを押した

「念のため言っておく。笑って言ってるがこいつは間違いなく本気だからな」

翌日、皇太子名で出された触れに、帝國中を驚愕が走った。ノラート亭もまた、その例外ではなかった。

「やはり殿下はあの娘に決められたのね」

ノラート婦人は何度も頷いた。

「私たちはダンスどころかろくに近付くこともままありませんでしたし」

「近づけたところで、相手があれば最初から勝ち目無かったわ」

二人の娘も口々に言う。

「今さら言っても何だけど、エラなら意外といい勝負ができたかもね。ちゃんと化粧して着飾ればだけど」

「あの娘も似たようなタイプだしね。でも本当に今さらね」
それがまさか本人とは露知らず、母娘は笑い合った。

その頃厨房には使用人達が一堂に会し、まさに噂の真つ最中である。

「似顔絵に賞金？何だいそりや、指名手配も同じじゃないかい」
洗濯籠を持った小太りの中年家政婦が呆れはてた様子で言う。

ビラを手にした御者は困惑顔だ。

「名前も分からないお妃候補が行方知れずなので広く情報を求む……とは、ね」

「で、どうする？」

コックは手を休めずに、端的に訊いた。

「この絵、どう見てもあの時のエラお嬢つすよね」

「あんた、なーにを言わずもがなのことを」

「いてっ！ひでえなあアイラさん」

年少の使用人が言って、家政婦にはたかれる。

「みんななんて顔してるんです？これって、いいことなんですよね」

「ああ、まあ、な」

と御者の返事は煮え切らない。

「だってお妃になれるんでしょう？俺たち使用人といっしょに働かされて、貴族のお嬢様らしい事はなにもできないでいたエラさまがですよ。これがめでたくなって、なにがめでたいっていうんですか」

「そりゃあそうだ。確かにあの方ならさぞかし立派なお妃になれるだろうし、他に相応しい方がいるとも思えないね。殿下もお目が高いよ。けどねえ」

と、アイラも奥歯に物が挟まったような口調だ。

「何だっつのさ、みんな」

「ご本人が望んでおられるのかわからない」

コックの言葉は、興奮した年少の使用人に冷水を浴びせる効果があった。

が、

「つて、未来の皇妃さまだぜ。皇太子殿下が二目と見られない醜男で性格も悪いとかならともなく、いい男で紳士で武芸の達人なんでしょう？普通断らないよな」

「普通ならな」

「エラさまだからねえ。こんな状況に甘んじて笑っていらつしやるようなお方だよ」

「受けるおつもりなら、最初から逃げ隠れはならさないだろうよ」

「…納得できねえつす。これじゃあ何のためにお膳立てを整えて舞踏会に出ていただいたのか」

ノラート亭に訪問者があったのはそのさらに翌日である。

「見たか？あの鎧は近衛騎士団だぜ」

「あつちは、ノラート様のお宅の方だな」

人々が見守る中、豪華な鎧とマントに身を固めた六人の騎士は肅々と通りを行き、さほど大きくはないが趣味の良い邸宅前で駒を止めた。

先頭の騎士がひときわ立派な馬から降り、他の騎士達がそれにく。

「当家の執事長をとめるコーネルです。ご用を承ります」

ノックの後間髪をおかず姿を表した執事であったが、その完璧な所作は先頭の騎士の顔に目をやった途端に凍り付いた。

「早朝からのご無礼をお許しいただきたい。実は…」

「お、御館様！？」

騎士の言葉を遮るように、執事の口から言葉が漏れ出した。

「…察するに、それは故ノラート卿の事でしようか」

執事はなおまじまじと騎士を見つめていたが、すぐに鎧に象眼された紋章に気づき、顔面蒼白となった。

「たつ、大変失礼をいたしました。皇太子殿下。此度はいかなる御用向きにて、わざわざお運びいただいたのでしょうか」

「いえ、あくまでも忍びですから配慮には及びません。用向きは取りあえずおいておいて、卿はそれほど僕に似ておられたの

かが気になりますね？いや、逆かな？」

興味深げに皇太子は尋ねた。

「母方の親戚にあたると聞き及んでいます」

「畏れながら。確かに殿下のお姿は若い頃の主を思い起こさせますが、何より身にまとわれた雰囲気はうり二つと違ってよいかと。こうしていても主と会話しているような錯覚に陥ります」
「ヒューザー卿も母上も似たような事をおっしゃっています」

なるほどとばかりに何度もうなづく太子を尻目に、騎士の一人が執事に耳打ちした。

町の人々が館を遠巻きに囲み、彼らのやりとりを固唾をのんで見守っている。少なくとも込み入った話に向いた状況ではない。

「これはしたり。殿下の御前で失態続き、このコーネル一生の不覚です」

「まあ、お気になさらず」

「ひとまず中へ。奥方様を呼んで参ります」

扉を引いて勧めるコーネルに、皇太子は、

「いえ、本日は末のお嬢様にお目に掛かりたくまかり越した次第です」

「！」

執事が顔をひきつらせたのと対照的に、耳をそばだてていた町の人々は互いに顔を見合わせて笑った。ガッツポーズをとる者や、中には小さく拍手するものもいる。

「さき、とにかく中へ」

こわばった表情のままで、執事はまるで押し込むような勢いで騎士達を館に招き入れた。

ややあつて。執事から知らせを受けたのか、一人の婦人と二人の若い娘が転がるように飛び出てきた。よほど慌てていたのだろう。息を切らせ頬を紅潮させての登場は無礼ではあるが、身支度や化粧をなおざりにするわけにもいかず、かといって長々と太子を待たせるのはなお考えられない事であつた。

「お初にお目に掛かります。当家の主、シリル・ノラートにございます」

「娘のアリエットにございます」

「ブリジットと申します」

彼女らは降つて湧いたような皇太子の来訪という状況に対し、歓喜と畏怖と混乱から脱していない様子である。皇太子はつとめて優しく声をかけた。

「いいえ、お三方とも先日の誕生会にてお見かけいたしました。その節の御厚意には感謝に堪えません」

「それは、もったいないお言葉です」

「それにしても皆様お美しい。豪華なお召し物や装飾品にも負けないだけの御器量をお持ちだ」

三人の顔がさらに紅潮する。半ば社交辞令と分かつてはいいても、嬉しくないはずがない。

娘達にしてみれば、それならば舞踏会で声をかけてもらえればという恨みもないではないが、ここでそれを言うのは礼を失する以上に何より惨めだろう。

「ところで、本日伺つたのはほかでもない。お嬢様の事です」
「末の娘とは、こちらのブリジットの事でしょいか？」
皇太子はかぶりを振る。

「いいえ、ここにはおられぬ義理のお嬢様の方です」

「…あの、それは、エラの事をおつしやつているのでしょうか？」

シリルの混乱には一層の拍車が掛かつた様子だ。執事長コーネルの言葉は一笑に付したが、今度は皇太子自身が言うのであるから間違ひはない。しかし理由がまるでわからない。この高貴な人物と義娘との間には何の接点も無いはずなのに。

「ええ、その通りです。その方にお会いしたい」

「…末娘なら執事を探させにやつております。もうしばしお待ちでございます」

ちょうどその時、扉が開いた。が、そこに繰り広げられたのは、その場にいた誰の予想ともかけ離れた光景であつた。

姿を見せたのは灰掻き棒を手にした一人の娘。粗末な服に薄汚れたエプロンを身につけ、編んだ髪を紙紐でくくつている。

あり得ない状況に、シリルと二人の娘は蒼白となつて絶句し、ただただ口をぱくぱくやるばかり。皇太子の背後を守るように居並ぶ騎士達もまた啞然としている。

その娘は沈黙に包まれた応接間を横断して暖炉に歩み寄ると、種火を掘り出して紙片を投げ入れた。

「まだ春とは言つても名ばかり。外はお寒うございましたしよう」

小声でそう言うと、娘は薪をくべ始めた。

お世辞にもお客様の前に現れる姿とは言えないし、ましてや太子の御前だ。普通であれば家長であるシリルあるいは執事長コーネル自ら行うべき仕事であるが…シリルは緊張のあまり動けず、執事は席を外している。見ていられずに出てきたという事であろうか。

「すぐにお茶をお持ちします。ごゆっくりとおくつろぎ下さい」「おっと」

一同の呆然とした視線を浴びつつ退室しようとする娘の腕をつかんだ者がいた。

誰だろう、皇太子である。

「く、くっくっくっ」

俯いて手を伸ばしたままの太子の肩が震える。

「何か？」

「はははははははは！いや、まったく、そう来るとは予想しなかったよ！」

娘の体を引き寄せ、そつとおとがいをつまむと、終始俯いていた顔を上げさせた。

ハンカチを取り出して娘の顔についた煤と灰を拭い、太子は満足げにほえんだ。

「見つけましたよ、シンディー殿」

この後の混乱は筆舌に尽くしがたいものであった。

執事長は腰を抜かして膝をつき、女主人と娘達は気を失い、騎士達は訳が分からぬまま慌てて彼女らを介抱し、使用人達がどつと飛び込んできて口々に娘を弁護した。

使用人達に劳いの言葉をかける皇太子。その傍らには泣き笑

いのような複雑な表情を浮かべるシンディー、いやエレナ。

「悪いのは俺です。ちゃんとお嬢様に伝えておかなかったから。まさかいつもの格好で出て行かれるとは思ってもよらなくて、ただ殿下を暖めて差し上げたい一心で…」

床にすりつけんばかりに頭を下げてまくし立てる年少の使用人の肩にぽんと手を置き、皇太子は笑って言った。

「いいえ、感謝していますよ、優しい妖精さん」

その様子を見ていた若い騎士達、太子の同門にして親友達は、ようやく合点がいった様子で互いに笑いあい、拳を打ち付けあった。

皇太子殿下、舞踏会で見初めた美少女と再会。そのニュースはたちまち帝国中を席捲した。

特に熱狂したのは一般市民達である。

お高くともったところが無く町の人々と親しく接していたエレナにはもとより支持者が多かった。さらに、使用人にまじって仕事をするような小貴族の娘が皇太子の心を射止めるという華々しい物語が市民の心をとらえ、町中がエレナの話題一色になるまでに時間は掛からなかった。

やがて、一つの噂が囁かれ始める。いや、以前から囁かれていた噂がより一層の現実味をおびるようになり、それはついに皇宮にまで届くに至った。

義母・義姉が彼女を虐待していたというものである。

父親の連れ子が、父亡き後で虐待を受けるようになる、とい

うのは確かに説得力のある図式である。才気と容姿で母の連れ子に勝っていればなおさらだ。

そもそもノラート家は小なりとはいえ貴族の端くれ。生活に苦しみほどではない。また義母の実家は裕福な豪商で、焼け落ちた屋敷の再建に際しては少くない金額をぼんと出している。

そんな環境で、娘は着飾ることもなく粗末な衣服で使用人と一緒になって働き、彼らと同じ食事をとっていたらしい。

娘いうところの「親切な妖精さん達」、ノラート家の使用人の一人はこう話したという。

「エラ様はいつも笑顔でおっしゃってたよ。『私にはこれが性に合っていますから。きれいなドレスなんて柄ではありません』ってね。でも、無理してるのが見え見えで、痛々しかったよ。で、あの方がそれなりにでも着飾ったら、豪華なドレスのお嬢様方も裸足で逃げ出すんだって証明したくてさ、有志一同であんな事企んだってわけ」

また別の者は、

「『みすばらしい格好が好みなら好きにしろなさい。でもそんな姿で出歩いたりして、私たちに恥をかかせないでね』『何なら貴女に相應しい服を買ってあげてもよくってよ?』といった具合です。わずかに焼け残ったエラ様のお召し物を物欲しげに眺めては、『お気に入ったものがあれば差し上げます』と言わせていた方々の台詞ですよ。買って欲しいなんて言えますか?」

いささか感情的だがこんな証言もある。

「お嬢様はご遠慮なさってました。自分は本来この家にいる資

格がない、と。そこに付け込まれたんですよ。名門ノラート家の姓を名乗る資格がないのはあの成り上がりどもの方です」

町の人もこう言う。

「前々からおかしいとは思っていたんだ。エラさまとあの二人には単なる義理の姉妹では説明できないような不自然さがあったよな。これで納得できた」

エレナを褒めそやす声に比例するように、以前から好感情とは言えなかったシリルと二人の娘達への風当たりが急激に強くなっていったのも頷けよう。

一方、美しく才気煥発な娘は皇宮にて下にも置かず歓待を受けた。皇太子は言うに及ばず、皇帝は手ずから杯を与え、皇妃は「かわいい娘」と呼んで秘蔵のドレスや宝石を分け与えた。しかしエレナは妖精印のドレスを大切に着用し、与えられたもののほとんどをノラート家に送ってしまった。彼女の微笑みは半ば泣いているようで、いかにも本心を押し隠している様子が見え隠れしていた。

そんなある日のことである。

エレナの義姉の一人、ブリジットが自ら命を絶った。

ますます勢いを増す嫌がらせに耐えかねて、自室にて首をつったのだという。

さすがに死人まで出たとあつては穏やかではない。この一件は熱狂する市民達に冷水をかける効果があった。嫌がらせはよ

り陰湿な形で継続されたが、表だつての攻撃は多少なりともな
りを潜めた。

エレナは義母と義姉の恨みを込めた視線を浴びながらも、葬
儀に参加した。

予想を遙かに上回る数の参列者の間では、聖職者の説教の間
もひそひそと小声でやりとりが続いている。

「そんなに楽しいですか？」

小さいが通る声が墓地を貫き、沈黙を呼び戻した。

「殿下から隠れていればこんな事にはならなかった、その通り
です。それで義姉が還ってくるのなら、いつでも殿下の元から去
りましょう。でもそれはもうかないません」

常日頃の日溜まりのような優しい眼差しは影を潜め、冷たい
氷のような眼差が一同を舐めた。

「だから、義姉と最後の時間を過ごさせてください。ただ姉の
死を悼めないのなら、今すぐお帰り下さい」

参列者の大半は、いたたまれず即座に墓地を去った。

残った者達の多くは亡くなったブリジット達と縁が深く、家
族への中傷を捨て置いて皇家との縁を深めるエレナに対しては
むしろ批判的な人々だった。しかしこの出来事により、彼女も
また苦しんでいる事を知って同情するものも多かったという。

そして事件は続く。

葬儀が終わるとシリルは役所に向かい、残った者の多くは彼
女についていった。

今や残り二人となったノラートの娘達だけが、墓前に取り残

された。

しばし無言の時間が続いた後、彼女たちの間にわだかまるも
のを象徴するかのごとく、天をひっくり返したような土砂降り
となった。

「エラ、あなた……」

アリエットが何か言ったが、暴風雨のためとぎれとぎれにし
か聞こえない。

「義姉さん？」

歩み寄った時、アリエットの手で何かが光った。

「――」

エレナが飛び退いたため、突き出された白刃は空を切る。

「義姉さん、何を……」

急な突風に二人のボンネットが飛ばされた。ペールの陰から
露わになった義姉の目は憎しみに爛々と燃え上がっていた。

「私はブリジットみたいに殺されたりしない！」

逆手で握られたナイフが振り上げられた。

「あなたの思い通りに、死んでなんてやるもんかあつ――」

寸鉄さえ身に帯びぬエラの命は風前の灯火と見えた。

しかし、襲撃者は横合いから跳びかかってきた影によつて、
どすんと鈍い音とともにじき飛ばされた。起き上がったとこ
ろに一太刀。首から血を吹き出して倒れるアリエット。

「エラ殿、大丈夫ですか？」

抜き身の剣をひつぎげた皇太子が、エレナを背にかばうよう
に立つ。

素人目にも致命傷であることはまず間違いない、太子の行動

が念のためでしかない事は明らかだった。事実、アリエットは二度と起き上がることはなかった。

たつぷり数分の後、結果的に最も消極的な形で義姉の死を確認してから、エラはようやく口を開いた。

「お礼を申し上げねば、なりませんね」

「こんな事もあるうかとひそかに様子を見ていたのだが、当たって欲しくない予感に限って当たるものです」

「…殿下の腕前なら、傷をつけずに取り押さえられたのでは？」

「帝国の法では死罪は免れない。せめて苦しまぬように…いや、言い訳でした。万が一にもエラ殿が傷を負つてはと、つい」

表情は晴れなかつたが、娘は太子の説明に一応納得した様子であつた。

「いえ、殿下を責めるつもりはございませんし、ご心配なさらずとも結構です。きちんと証言させていただきますから」

「証言、ですか？」

「はい。殿下が義姉を斬殺されたのはあくまでも不可抗力であつたと」

皇太子は苦笑しつつ頭を下げるしかなかつた。

「ご配慮、いたみいます」

立て続けに二人の娘を失つたシリルの受けた衝撃の大きさは想像に難くない。

ブリジットの死も人に誇れる質のものではなかつたが、アリエットの死にいたつてはまさに家名の恥といえし、事実、国

法に従えば遺体は葬儀もなくうち捨てられる事になつていた。

「義姉は衝撃のあまり心を病んでいたのみで罪があるわけではない」とのエレナの願ひ出により、病死扱いとして尋常の葬儀が許されていたが…シリルはその葬儀すら執事に任せて自室に引きこもつてしまつたのである。ゆえに、アリエットの葬儀は執事長コーネルを喪主代行として行われる事となつた。

葬儀は形式的に、あくまでも淡々と行われた。

参加者はごくわずかであつたが、その中には関係者として皇太子とエラの姿があつた。

式が捌けた後。

教会の一室に、コーネルと皇太子の姿があつた。

「このような手段を用いた非礼をお許し下さい」

コーネルはその立場を利用し、式中に密かに太子に紙片を渡していた。

「エラ殿の耳には入れられぬ、あくまで僕だけに訊かせたい話があつたというわけだ。察するに、それに値するだけの理由があるのだろうか？」

「はつ。ノラート家に使える者としてはこれは背信行為かもしれません。しかし、帝国のためと思えばこそ、あえて執事の信念を曲げ、亡き旦那様を裏切りましょう」

「ふむ、穏やかでないね」

コーネルは一度咳払いすると、皇太子の耳元に口を寄せた。

「お耳を拝借いたします」

「かまわないよ」

「…端的に申します。殿下、エレナお嬢様を信じてはなりません」

ぬ」

太子の目が細められた。

「面白いことを言う」

「冗談ではございません」

背筋に薄ら寒いものを感じつつ、コーネルは話を続ける。

「旦那様、すなわちノラート卿には亡き先の奥様以上の長きにわたってお仕えさせていただきました。親友と仰っていたいたことも一度や二度では御座いせんし、それ以上の信頼関係があったと自負しております」

「前置きは結構。ノラート卿より何を聞いた？」

そう問う皇太子からは普段の柔らかない雰囲気完全に消え失せていた。

コーネルは一つ頷くと、

「旦那様は、お嬢様に誘惑された事があると」

執事長の話はこうであった。

ノラート婦人が亡くなった翌日、仮宿の寝室の暗がりの中、

彼女は卿を待ち受けていた。

無論突っぱねた卿であったが、「やつと二人きりになれました」と言った娘に、戸惑い以上に言いしれぬ恐怖を感じたという。

エレナを良く知るコーネルにとつてはにわかには信じられない話であったが、このような悪趣味な冗談を言うような卿ではなかったし、その後の卿は屋敷では必ず側に誰かを置き、決して一人きりになろうとはしなかった。

その後、卿は仕事の忙しさにかまけてろくに娘を構えなかった事を深く後悔し、あえて子連れの未亡人との結婚を急いだ。同年代の娘との交流が良い方向に影響することを期待したので。

事実、その後のエレナは卿に迫るような真似をする事はなかったというし、コーネルが見る限りでも、若干ぎこちないながらも義母・義姉と良好な間柄を保っていた。

コーネルはこの時点でも、誘惑うんぬんは卿の勘違いであったのだろうと考えていた。それは卿が亡くなった後も変わらなかったが：

「しかし、こたびの出来事で確信するに至りました。卿は勘違いなどなさつてはいなかったのだと」

「まだ続きがあるんじゃないのか？」

硬い表情で聞き入っていた皇太子は、コーネルを促した。

「もし私の想像が真実であれば、殿下にとつても面白いでは済みません」

「ほう？」

「これはあくまでも推測に過ぎませんが、あの火災と先の奥様の死にはお嬢様が関係している可能性があります。旦那様の死に関しても、あるいは」

「落馬されての事故死と聞いたが」

「以前と何も変わっていない事をほめかすなどしたら、いかがでしょうか？ 激務にお疲れのところさらに心労が加わるように仕向けられ、あるいは事故を誘発させるぐらいの事は可能

かもしれません」

「面白い推理だ。執事とは物語作家の才能も必要な職と見える」
皇太子はそう言つて笑みを浮かべた。

「ご高説に従つて今回の一連の事件を解いてみせると、邪魔者である義母と義姉達を排除すべくあえて虐待を受けているのかのごとく振る舞い、世論の攻撃をもつて自殺に追い込み、あるいは自らを囹として激発させた、とでもいうことになるのかな」
茶化するような軽い太子の言に、コーネルは深々と頷きかえしてみせた。

「旦那様の御再婚直後からの計画だったのかもしれませんが。旦那様に見切りをつける方が先となつてしまったものの、舞踏会が仕掛けてあつた罠を閉じるきっかけとなつた、といったところですか」

「なるほどな」

衝撃的な告白を耳にした直後としては、皇太子の機嫌は奇妙なほど良かった。

非現実的さのあまり冗談として捨てられるのかと心配したのだろうか、コーネルが再び食いがらうと口を開きかけたが、真顔となつた皇太子がそれを制した。

「して、執事長殿は僕に何を望んでいる？そのような想像と推測で、エラ殿を罪に問えとでも申すのではあるまいな？」

「……いいえ、殿下の心の中にとどめ置き下さり、ご判断の助けとしていただければそれで十分でございます。ただ、老婆心ながらも一つだけご忠告させていただきたいと思いますが、よろしいでしょうか」

「ああ」

「おそらくお嬢様は殿下に旦那様を重ねていらつしやいます」
「それはつまり、彼女の機嫌を損ねれば僕も消されかねないと、そういうわけだな」

しばしあつて。得心したかのように頷いた皇太子は、言いにくいことをはつきりと言ひ切つた。

「ご賢察です。殿下におかれましては亡き旦那様の心をお酌み取りいただければ幸いです」

「他に、この話を知っている者は？」

「もし可能性があるとすれば、奥様のみかと」

皇太子は頷くと、席を立つた。話はこれで終わり、という意思表示である。

「貴公の忠告は検討に値する。追つて沙汰があるだろう。今は失意の只中にあるノラート婦人をたすけてやるように」

「御意」

「約束しよう。エラ殿に悪いようにはしない」

その二日後。

ノラート婦人シリルとノラート家執事長コーネルに対し、死刑が言い渡された。

罪状は故ノラート卿人および婦人の謀殺および、ノラート家乗つ取りの陰謀を企んだかどであり、さらにその罪をエレナに着せようと企みさえたというものだ。

刑は慈悲を持つて非公開とされた。これはついに家族全員を

失うエレナへの慮りと噂された。

「国法の上で死が免れないのであれば、せめて苦しまぬようにはできぬものでしょうか」

彼女の希望を容れ、刑は眠り薬を用いた上で執行された。実際、エレナは気丈にも皇太子とともに刑に立ち会い、一部始終を見届けたという。

「短い間でも家族だった人がギロチンに掛かるのを見るのは、気分がいいものではありません」

特設の刑場から帰り、憔悴しきった様子でそう語った彼女を、周囲の者達が口々に慰めた。

「いいえ、あの者達は何年にもわたって悪辣な謀を巡らしておったのです。殿下御自らの調査で確かな証拠も挙がっていると聞きます。貴女がお気に病まれる必要はございません」

「お辛い目にも遭われたそうですが、何年も敵中にいらつしやった貴女の身に直接的な危害が及ばなかったのは不幸中の幸いでした」

彼女に対する同情の声もは多々あった。しかし、それ以上に多かったのは積年の怨敵といつても良い者達に対する寛大さをたたえる声であった。

こうしてノラート家ただ一人の生き残りとなったエレナは、屋敷に閉じこもり人前に姿を見せなくなつた。

わずかではあれ彼女と接する事の出来る使用人達も、彼女の顔さえ見る事もない街の人々も、噂でしか彼女を知らぬ多くの

国民達も、みなエレナの心の傷の深さに思いをいたし、同情と不満を口にした。彼女を解き放てるのはただ一人であると、誰もが知っていたからである。

人々の期待を一身に背負い、皇太子が重い腰を上げたのは、エレナが引きこもってから実に半月が経過した後であった。

さすがの彼女も、太子との面会を拒むことはなかった。

「もうとつくに愛想をお尽かされになったかと思つておりまして」

娘の顔にはやつれの色と自嘲の表情があつた。

「そろそろ良い頃合いかと思つてね」

対照的に太子の表情は明るい。

「経過は不本意なものだったかもしれないが、ご両親の仇もつた。これで君を悩ませる全ての厄介事は片付いたはず。では、一体何が今もつて君をそれほど不安がらせているのか、それを聞かせてもらえないかな？」

エレナは太子の問いに答えるかわりに、訥々と語り始めた。

「私の父は厳しい人物でしたが、母はいつも幸せそうに笑つていました。かつての私はそんな父が好きで好きで大好きで、いつか自分は父と結婚するのだと信じて疑いませんでした。そうすればきっと私も母と同じように笑えると。」

「そんな子供じみた夢はすぐに失われましたが、私は父に望みを託し続けました。父であればきっと私を許してくれると。」

「父を失つたその頃になつてようやく、私は過ちに気づきました。ありのままの私を受け入れてくれる存在など空想上のものではない。私は私に相応しい灰の中で生きていくほかはないの

だと。

「ですが殿下はどうして性懲りもなく私の前にあらわれては、何もかも諦めたはずの私をこうも混乱させるのでしょうか。」

「全身灰にまみれた私は、殿下にも灰をかけ続けてきました。」

殿下があくまで私を望まれるのなら、灰はこの帝国中に降り注ぐ事になるかもしれません」

それでも自分を求めるのか？

娘の目はそう問い返していた。

「僕は君とともに灰をかぶって生きることが望むよ。例えどれほどの人を巻き込もうともね」

皇太子はそう言つてエレナの手を取り、

「だからエラ、僕のところに来てくださいませんか」

ポケットから取り出した指輪を娘の指へと通した。

「来い、とご命令できる立場のお方の台詞とも思えませんか」

事この状況に至っても、娘は太子の本心をはかりかねているようであり、戸惑いの表情を浮かべて曖昧な態度を崩さなかった。

「君を何かで縛ろうというつもりはない。僕で不足だと感じたなら何時でも去ってもらってかまわない。何しろ今や僕たちはあらゆる意味で対等の立場にあるのだし」

「…殿下？」

この時皇太子は初めて、少女の前で凄みのある笑顔を見せた。

「僕らはともに灰にまみれ、いわば運命共同体でもある。ならばこそ、絶対の信頼に値するとは思えないか？」

エレナはその変貌ぶりにしばし呆然といていたが、皇太子の

真意をくみとるや一転して心からの笑顔で応えたのであった。

「…本当に変わり者の皇太子様です。あなた様というお方は」
「よく言われる」

こうして紆余曲折の後、エレナは正式に太子の求婚を受けた。

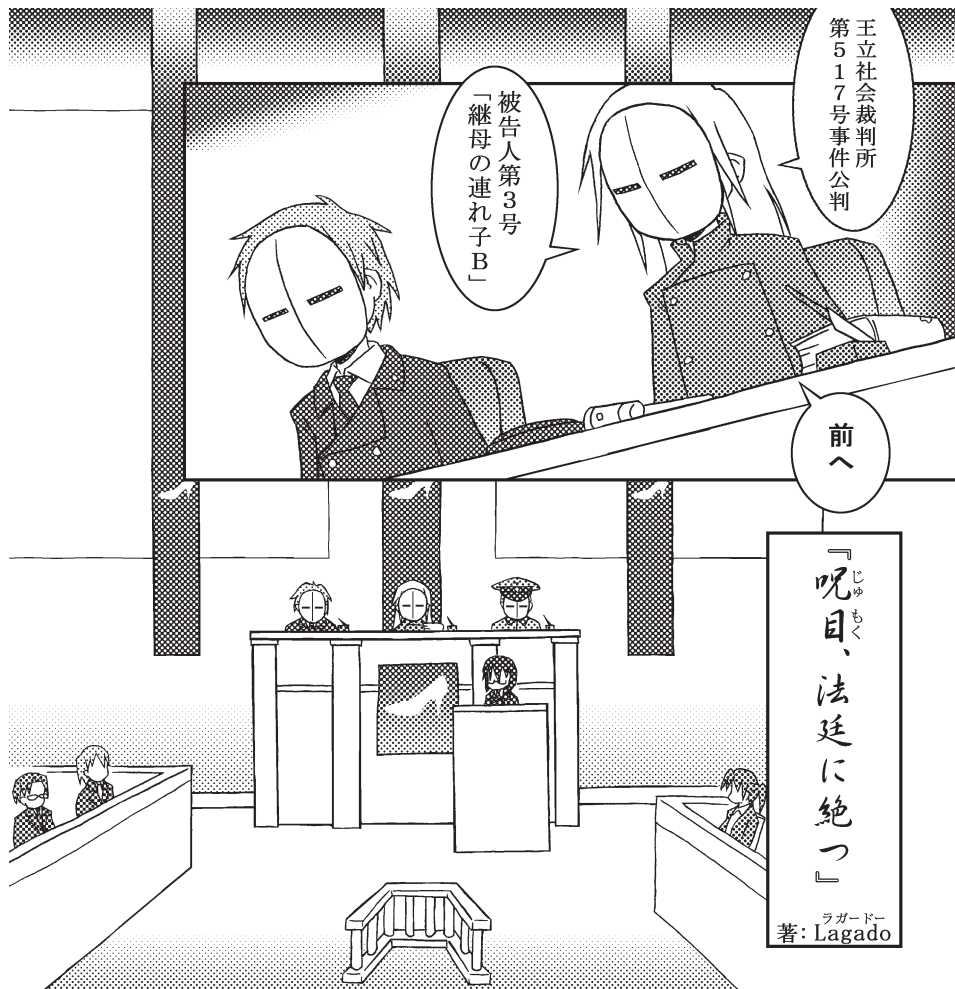
勅命を受けた特命大臣はわずか三日という早業で結婚式の段取りを整えてみせて太子を呆れさせた。当事者達以外の目にはそれでもじれったく見えたようであり、大変なプレッシャーの中の奔走であったようだが、実際には嬉々として職務をこなしていたらしい。

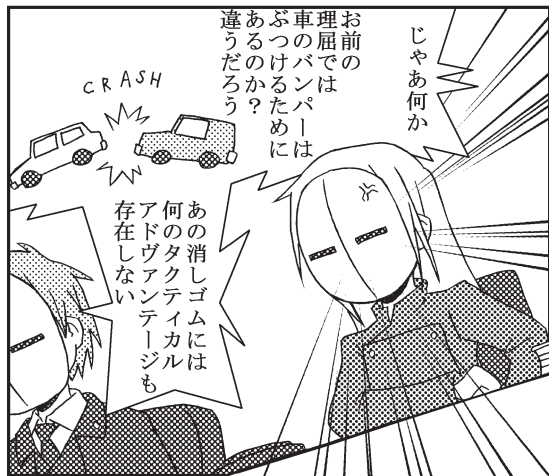
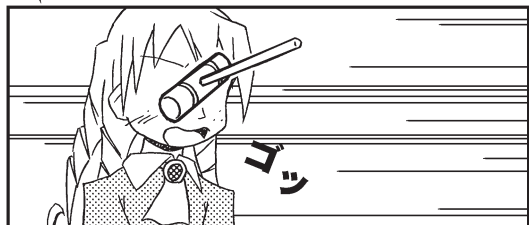
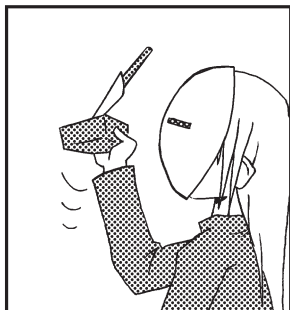
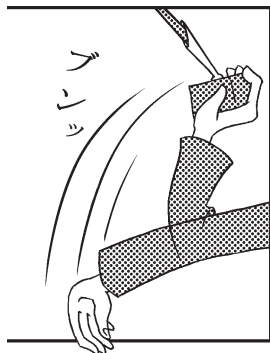
ノラート家の使用人の一人であるアイラは、皇太子のリクエストであのドレスを見事な花嫁衣装に仕立て直してみせた。

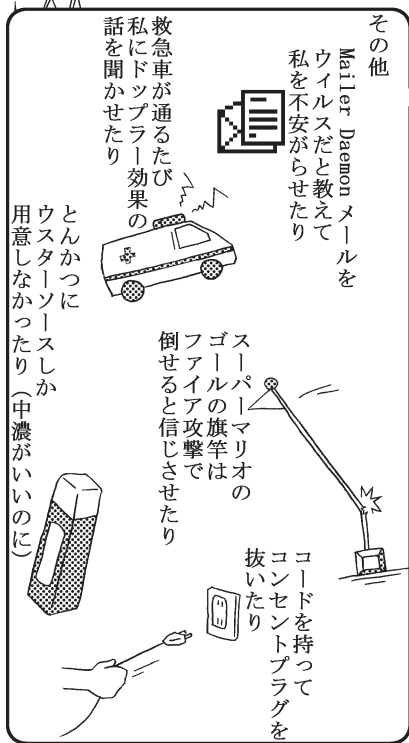
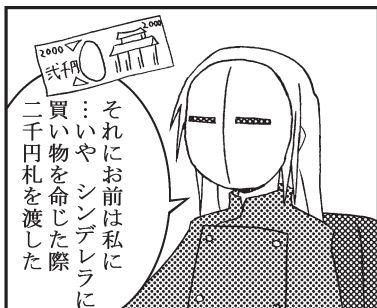
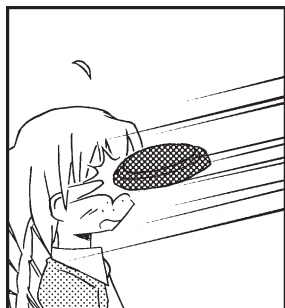
帝国の端の端からも、人々は世紀の結婚式を一目見んと昼に夜を継いで駆けつけた。

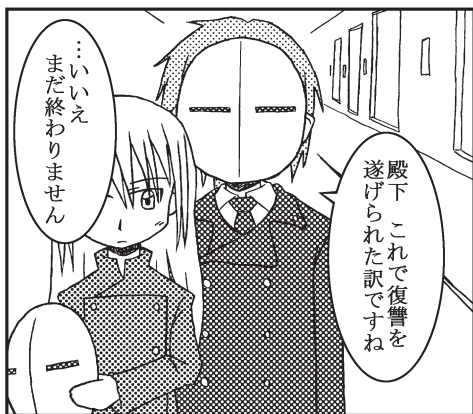
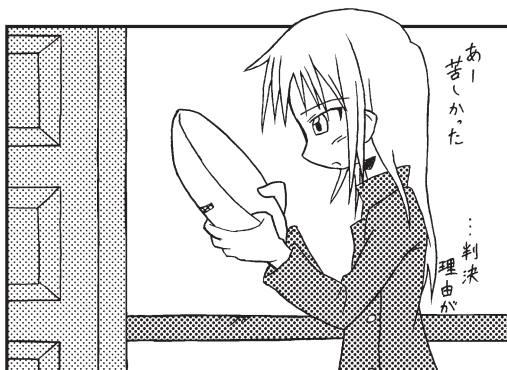
皇帝夫妻はもとより、貴族・平民、あらゆる階層の人々による圧倒的な支持と熱狂と祝福を受け、みじめな灰被り娘が皇太子妃の座についたのは婚約から七日後の事であった。

そしてその後、帝国は二人の元で栄華と繁栄を極めたという。









はびえすと☆ そーされす

Fukapon

「わかってると思うけど……」

「えーっ、ちょ、ちょっと、いくら何でも今ここでは」

「せっかく誰もいない教室を選んだのに、まだ注文があるのかあ？」

「と、当然でしょ？ あ、でもでも、教室で♡って凄いかもっ」
赤みを帯びた逆光に曝され、向かい合う二人の姿が長い影を作る。

「では、始める」

「うん——」

閉じられた彼女の瞳の、長い睫がかすかに揺れている。

窓から流れ込む、少し冷たい風のせいだろうか。

視線を重ね逡巡していた彼は意を決し、夕日色の髪が揺れる彼女の両肩に手を置いた。

「やっぱり追試だよ」

「……はいい？」

短く言葉を交わし、二人の男女は見つめ合った。

と言うに少々しっくり来ないのは、彼女の素っ頓狂な声故か。あるいは見開かれた瞳故か。

「ちょっとそれどーゆーこと？ あたしが追試っておかしいってば」

甘い乙女の表情から一転、ぶーっと頬を膨らませた彼女、パミュは言い返している。幼さが残る彼女がふくれると、ちょっと可愛い。なんて思っているのは正面の彼。

「いや、そう言われても、間違いなく追試だ」

テクサナは言い返されることを予期していたようでもないが、全く動じずに言葉を続けていた。

もはや特別な意味を持たぬ、向かい合って突っ立っているだけの状況を捨て、パミュは近場の椅子を引き出し腰掛けた。跳ねるように健脚を組み、せっかくのキュートな顔に頬杖をつく彼女は、テクサナの落ち着いた態度すら不満と言いたげ。

「テクサナだって知ってるでしょ。あたし、成績はいいんだよ？」

「ああ、よく知ってる。そもそもパミュの通知表は僕が付けてるんだから」

「ならなんで追試なのよう？」

全くもって不当であると思われる宣告に彼女は抗うが、相手は曲がりなりにも先生。成績のことでそうそうミスなどしない。

「魔法実技、また指示書に従わなかったら？」

「……うー。だ、だってえ、あれじゃあ可哀相だよ」

「気持ちにはわかるけど、指示を満たせば合格、満たさねば不合格なんだよ」

「そんなのおかしい。指示よりも高度な魔法を使っただよ？ もちろん合格でしょ？」

パミューは心当たりを突かれてしゅんとしながらも、反論を試みている。反論と言うより、子どもの我が儘感溢れるのは、彼女の容姿のためか。

「その、何だ……」

「なあに？」

「任務遂行能力の試験だから、『指示を満たしている』が最重要観点なんだよ……」

「えー、何とかしてよテクサナー。先生でしょお？」

もしくは、単なる我が儘だからか。

ぴょんと椅子から飛び起きて、彼のジャケットを引っ張り上目遣いで要求するパミューの愛らしさすら、追試を免れぬのに何ら影響することはなさそうだ。テクサナは極めて落ち着いて、どうしてか申し訳なさそうに説得を続けている。

「いや、先生だから、こうして悲しいお知らせをだな」

「やだやだー。あたし、人を不幸にするために魔法使いになったんじゃないもん」

そして行き着くところに行き着いたと、テクサナは手の施しようのなさに頭を抱えた。残念ながら身体的な腕は、パミューに抱きつかれてしまっていたが。

彼女の考えは理解できる。しかしそれは彼女がまだ、多くのことを知らない故の考えであると、彼は結論づけることにしていた。たとえそれが、無理な納得であったとしても。今のパミューを納得させるには、テクサナ自身も納得するほかない。

「いや、だから、僕たちの魔法があってこそ、その後の幸せの魔法が効くのであって」

彼の思考は、表情に出るのだろうか。今日も、今までも、パミューには到底納得できるものではなく、理不尽に響くだけ。

「何それ？ テクサナってば先生みたい」

「……僕、先生なんだけど？」

「ぶー。あたしの恋人はそんな冷たいこと言わないもん」

「そんなこと言わないでくれよお」

「そっか、先生は恋人のあたしよりも、生徒のあたしが大切なんだ。そりゃそーだよねー、良家の娘を落第させたとあっちゃ、学内屈指の魔法使いも名折れだよねー」

不機嫌ですよと腕を組むパミューに、テクサナはどうしたものかとそろそろお手上げ。

女の子とは面倒な生き物で、何かあるとすぐ「私と○○とどっち？」である。女の子がそんな生き物だとわかっていても、未だに対処法がわからないあたりが、面倒な生き物なのだ。謙虚なテクサナであったが、この話に限っては、自らの至らなさに悔いることもないらしい。

「……パミュー、頼む。頼むから、ちゃんと話を聞いてくれよお」

「聞きたくない。とゆか、話なら聞かなくてもわかってる」

しかし今日は割とあっさり、彼女が面倒を解除してくれた。彼女は腕を解くと、「仕方ないなあ」とブリーツスカートの後ろ裾を押さえるよう手を組みながら、氷解の態度を見せている。

「へ？ じゃあ、今度はちゃんと追試を受けてくれるね？」

「んー、受けるよ。よほどひどい指示じゃなければ、だけど」

「うん、それで十分。追試の指示は甘いから大丈夫。よかった

あ。どうやって説得しようかと、寝ずに悩んだ甲斐があったよ」

意外ではあったが、予想以上にうまく事が運んだことに感激しているテクサナ。自分の胸元にあるパミュの大きな瞳を見ながら、安堵の視線を送っている。

対するパミュは少し、おもしろくない。なんか、おもしろくない。

（あたしが困ったことになってるのに、テクサナが嬉しそうって変。おかしい）

そこでふと、彼女は思いついた。パンと手を合わせながら言葉にしてみる。

「へえ、そうなんだ。じゃあ、その努力を無駄にするのは悪いよね？」

「え？」

目をキラキラ輝かせて、胸の前で手を組み、彼を見上げるパミュ。組まれた手が皮膚の次には肋骨に触れそうな間隔が、また可愛さを引き立てているが。明らかに悪巧みの雰囲気だ。

彼女の变化に不意を突かれたテクサナを見て、これならいけると確信した声が、彼女の心中の台本を読み上げた。

「ちょっと駄々こねる」

「いいって、素直なパミュが一番可愛いって」

「素直じゃないあたしは嫌い？」

「そんなことないよ。どんなパミュも好きだよ」

「うん、あたしもテクサナ好きっ。じゃあね、んーと、合格したらご褒美に、あたしの欲しいものをちょうだい？」

「わかった……。僕が何とかできるものに限るよ？」

わざとらしい上目遣いは悪戯っぽく、しかし拒むことを許さない色を帯びていた。尤も脅迫的とか蠱惑的とかいう風ではなく、あまりの可愛さにテクサナは拒めないと言うだけのことが。

そんな反応を見てまだいけると、ちょっと恥ずかしそうな雰囲気醸し出しながら、くるりと背を向けた彼女が続ける。

「うん、もっしろん。……あとね」

「まだあるの？」

「あるのー。ここでキスしてっ」

パミュはもう一八〇度ターンして、クッと顔を上げて見上げる。

同時に言葉に詰まるかのように、一歩引いてしまったテクサナ。

「……いや、あの、パミュ？　ここは学校で、ここは教室だよ？」

「そうだよ？　キスが嫌なら、エッチして？」

「ばばっばばか、なっこと言うなよっ」

「えー、恋人同士なんだからいい加減しよおー」

胸元で組んでいた手をいつの間にか解放し、テクサナの腰に細腕を絡めていた。

パタパタと足踏みしながら、自身の胸を彼のお腹にくっつけてすりすり。

（女の子が胸でおねだりだよ？　効果あるよねー？）

パミュは色仕掛けのつもりだったが、テクサナはそのつもりにすら全く気付かなかった。ある人にはあるものがない彼女である。無理に胸をくっつけようとした結果、妙に背を反った体

勢になっていることに彼は不思議を覚えただけ。

よって、彼には期待された変化が起こらず。すんなりと話を続ける。

「いや、だからな、言ったら？ パミュが卒業するまではダメだって」

「またその話かぁ。テクサナ、案外まじめだよー。教え子に手を出しといてさ」

「っ……。それは、その、まあ、そうだけど、一応、何と言うか……」

（またお預けかぁ。でも、学校でキスできるだけでもラッキーだよね）

弱みを突かれて目を逸らす彼を見て、パミュは妥協案で我慢しておくことにした。

「だから、キス、ね？ キスしてくれたら追試にもパスできるから」

「仕方ないなあ。じゃあ、ちょっとだけだよ？」

パミュは少し背伸びをして、テクサナは少し屈んで。

二人は瞳を閉じて、唇を重ねた。

っ。

キスする時のパミュを見ないことは、テクサナが理性を保っている一因かも知れない。けれども、二人ともそんなことには気付きもせず、ただ純然と幸せな一瞬を交感する。

「……、ありがと」

唇を離れただけの距離。

視界を開けば真っ新な肌、幼さが残る彼女の笑顔。

あまり凝視していると気が狂いそうになる。眼前で揺らめく前髪に捕まる前にと、テクサナは浅く赤らんだ顔を離れた。

「ど、どう、いたしまして」

「あはー、テクサナってば照れてるー」

「いや、だって、学校だしさ……」

「あたしはどこでも、テクサナとのキスが一番元気になるよっ。じゃねー。ばいばーい」

「ああ、また明日な」

大きく手を振りパタパタと走り去る彼女に、中くらいで手を振り返す。

彼女は気にもしていないだろうが、彼は学校でしてしまったことに、非日常に恥ずかしさを感じていた。先生と生徒のはずなのに。ましてや。

（まったく、見られてたらどうするつもりなんだよ）

あわせて多少の不安もあったが。結局、彼女が喜んでくれたのだからという幸福だけが、彼の頭の中を占拠し始めた時。

「あらまあ、見られていたらどうなさるおつもりなんでしょうねえ？」

次の、聞き覚えのある声が飛んでくる瞬間までは。

「——っ！」

「ごきげんよう、先生」

「せ、せふいりる……」

声の主に慌てて、教室の入り口へと視線を送ると。

朱色の順光を浴び、すらりと伸びた長身。それはパミュのク

ラスメイト。

「んもうっ、堅いです、先生。セフィリルではなく『リル』とお呼びくださいと、いつも申しているではありませんか」

「あ、ああ、リル、その、あの……、さ」

生粋のパミュよりもずっとお嬢様っぽい彼女。笑顔も、口調も、非常に穏やか。しかしこの場に変容似つかわしい、含みを持つていることは誰の感覚にも明らかだ。

セフィリルは串刺しにするようテクサナを凝視して、腰まである黒髪をわざとらしく梳きながら、一步一步と距離を詰めてきた。

「おっしやりたいことはお察しいたします。ええ、一から十まで、一部始終、おねだりからお別れまで拝見いたしました」

「……はあ、そうか……」

彼女が現れた瞬間に覚悟していたことだが、やはり全てを見られていた。となれば、もう、頼み込んで口止めするしかない。しかしどうやって。頼み込むと言っても、頭を下げる程度で済むのか。

彼が一生懸命に考えていることは端から見えていて、視線が定まらぬ程の焦りようがおかしい。

(いっそのこと強請ってみるのもおもしろいかしら)

つつい笑いみをこぼしながら考えてしまっても、考えるのみにとどめるのは彼女らしい。

彼女はまっすぐと前を見て、綺麗に伸びた指を柔らかな胸に当てながら。

「でも、ご心配なさらずに。今のことは私の胸にとどめておき

ますから」

「ホ、ホントかっ？」

彼女は俯きがちに、長い睫が見えるよう視線を外しながら。

「……私、あまり信用されていないのですね。悲しいです」

「い、いや、そんなことはないんだが、その」

彼女は弾んだ声で、前屈みにクッと顔を上げて。

「ふふっ、ちょっとからかったただけですから。先生が生徒のことを信用なさっているのは、よく存じております」

「え、あ、取り立てて言われる程でも、ないと思うけど……」

「いきすぎて恋仲になったりする程に、ですよ」

「それを言わないでくれ……」

とにかく胸をなで下ろすテクサナを見て、戯けたままのセフィリル。その仕種は、パミュと似ていた。気を緩めるのに忙しい彼は、似ていることにすら気付かなかったろうが。

セフィリルはそんな彼を推し量り、もう少し話すことがあるかなと判断していた。

「ところで先生、パミュが男の子に人気あるの、ご存じでした？」

パミュがいた椅子に座る彼女の、現れた膝頭が方正で初々しい。

しかしその他は、身体も表情も、話し方も、同い年とは思えぬ実りよう。

「へえ、そうなのか。パミュ、可愛いからなあ」

総じて、ぽかーんと「パミュ可愛い」しか考えられていないテクサナと比べても、セフィリルは年上に見える。

「あらあら。殿方は鈍くていけません。のろける前に考えることがおありでしょう?」

「……?」

会話もすっかり、生徒と先生が逆転していた。

セフィリル先生はもちろん優等な先生、にやりとするのを抑えて、計画通りに授業を進める。

「先程パミュが『先生とのキスが一番』っておっしゃったの、お忘れですか?」

「……あ」

(ふふっ、先生ってば可愛いっ)

内心だけでなく、表情でも喜んでしまったのは、計画通りか計画外か。彼女が首を傾げると同時に、窓からの風が癖のない髪をふあっと梳き流す。真っ白に浮き立つ笑みは、テクサナから視線を外さなかった。

「他にどなたとキスなさっているんでしょう? ……そう言え

ば、隣のクラスのクロアくんと仲良かったかしら」

「そ、そうなのか?」

「ええ。残念ながら、それ以上のことは存じませんが」

「……いや、まさか、ないよな?」

あまりの不安に距離を一步詰めて、テクサナは鬼気迫る顔で問いたです。

腰を少し浮かせたらキスでもできてしまいそうな距離に、セフィリルは満足げながら実に落ち着いている。

(もう一步近づいてもいいんですよ?)

ここで計画を変更するのが得策かも知れないと思う心中とは

裏腹に、穏やかなま科白を繋いだ。

「さあ? ご自分が初めてだったからって、パミュも初めてだと決めつけるのはよくありません」

「いや、だって、パミュも初めてだって」

「そうでしたか。先生、初めてでしたか」

「うっ……」

上から目線のセフィリルはそっと中指を伸ばして、上目遣いの先にあるテクサナの頬を撫でる。

普段のテクサナならその行為に退けてしまっだろうが、ばつの悪さにそれどころではないらしい。

「その年で初めては、ちょっと格好悪いですよねぇ?」

「それを言うな……」

「でもま、いいと思いますよ。パミュも初めてでしたから、お似合いです」

「……え? だって」

「軽い冗談ですよ」

「そっかあ。よかったあ。そうだよな、パミュはそんなことしないよな」

細指から離れる顔の緩みように「ごちそうさま」とでも言わんばかり、彼女はブリーツを直しながら、席を立った。

「ええ。パミュは素直な子ですから。でも、そうやって思いこむのはいかなるものでしょう」

「あ、ああ、そうだな。気をつける」

「そうですね。いくら恋人でも知らないことはあるものです」

「……なんか含みがあるな?」

胸を見せずたおやかに出口へと歩むセフィリルに、テクサナは待ったをかけた。

当然呼び止められることを予期していた彼女は、声をかけられる前に歩みを止めていたが、あえて後ろ姿のままで答える。

「先程私は、お二人のことを秘密にすると申しましたが、あまり意味のないことかも知れませんか」

「……？」

「あら、わかりませんか？ パミュ自身が、堂々とおっしゃってますよ？ 『あたしとテクサナは恋人なの』 って」

「……っ！ つお、い、それ、ホントか？」

背で起こっていることは見えないが、見る必要もなからう。

テクサナの泡を食う様子がおもしろくて仕方がない。

「ええ。パミュは先生を氣遣って『テクサナには言っちゃダメ』って言ってますけど、もはや生徒はみんな知っているとします」

「なんてことを……」

「じゃあ、もう一つ教えてあげますね」

スカートがフレアを描くのも気にせず、会話にあわせて翻ると。

ここは案外、テクサナの弱い反応が返ってきた。

「いや、いい……。知らない方が幸せなこともあるから……」

（ふふっ、ダメですよ、先生。逃がしませんから）

「ここ重要」と指をピンと立て、彼女はキッパリ言い切った。

「パミュの相談相手はミカリン先生です」

「……………軽い冗談だよな？」

あまりの重要事項にテクサナの顔からは生気が失われ、今に

も死にそうと言いつつ、さうさし支えなからう。それでも勇気を振り絞り、再確認している。

「いいえ。真実です」

『ミカリン先生』って、もしかして主任のミカリヌーエ先生じゃないとか？」

再々確認している。

「いいえ。ミカリヌーエ先生ですよ。パミュは『ミカリン』って呼び捨てですけど」

しかし現実とは非情なものだ。彼が本当に膝を突き項垂れているのも無理なからう。

「……………なあ、僕は、どうしたらいいと思う？」

もはや視線を上げることすら叶わぬ彼を見て、なんだか嬉しくなってしまう自分にセフィリルは氣付いた。おもしろいことになりそうとは思っていたが、まさか快感にまで至ろうとは。

何にせよ大変満足であることに変わりはない。よってひとまず、これ以上困らせるつもりもない。床へと墜ちた彼に手を差し伸べた時、笑みはすっかり抜けていた。

「今まで通りでいいんじゃないですか？ 今更、ですから」

「……………ミカリヌーエ先生、ホントに知ってるのか？」

「ええ。少なくとも『今朝はおはようのキスしてくれなかったの』までは知っていますよ」

「なんてこった……。知りすぎだろ……」

「そうですね。『どうしたらエッチしてくれるんだらう？』とか聞くのも日常茶飯事ですしねえ」

「……………それは、冗談……………じゃない、か……。最悪だ……」

セフィールの手を取って立ち上がったテクサナが、崩れてしまいそうだったけれども。彼女はその手を、彼から離す。

「男子には今ひとつみたいですが、ミカリン先生、女子には人氣ありますからね。そういう相談も、いくつかは受けていると思いますよ」

「……慰め？」

「んー、単なる事実？」

「はあ……」

（あらまあ。慰めてあげた方がよいのでしょうか）

多少の逡巡があったセフィールではあるが、次の瞬間にはもう踵を返した。

「そういうことですから、キスシーンぐらい見られても全然問題はありませんよ。では失礼いたします。私は忘れ物を取りに来ただけですから。先生、また明日」

背中越しに届ける大きな声は、廊下にもよく響いている。

「あ、ああ。また明日……」

いつの間に取ったらしい忘れ物、携帯電話を手に持ちバイバイする彼女の後ろ姿を見ながら、テクサナは呆然とするしかなかった。

（……鞆、職員室なんだよなあ。置きっぱなしで帰ろうかなあ）

引きつった笑顔でテクサナが職員室に入るも、特に変わった反応はなかった。

「お疲れさまでーす」

室内の同僚に挨拶しながら自席に着くと、さすがに近接では表情が目立ったのか、周りから声をかけられている。

「先生、大丈夫ですか？」

「お気持ちばかりですが、彼女の場合、心配いりませんよ」
しかし無理な笑顔の原因は、単純に追試宣告にあるものと思われたようだ。

「え、ああ、そうですね。魔法自体はできる子ですから……」
適当な返事をしながら一人で針のむしろ感を味わい、頭を痛めていると。その頭上から、一番聞きたくない声がするではないか。

「テクサナ先生。ちょっと、よろしいですか」

しかも呼び出し。

何度も頭の中で「今更何も起こりようがない」と唱えながら、彼は努めて平静に答えた。

「はい」

「では会議室を取りましたので、そこらで」

「わかりました」

（大丈夫、普通に答えられた。いいぞ、自分）

彼は自分自身を無理にでも褒めながら、覚悟を決めてミカリヌーエの後を歩く。その足と手は、同じ方向に出ていた。

（あー、ありゃ主任に怒られるわ）

（テクサナ先生、ガチガチだねー。主任怖いしなあ）

（ご愁傷様、先生）

周りの同僚たちは、彼が追試の件で呼び出され、緊張しているものと思っている。幸いにしてと言える状況だが、彼の心中

には状況を感じる余裕もないだろう。

「どうかなさったんですか？」

ミカリヌーエはコーヒーを片手に、柔和な笑顔で話し出した。

「えっ、あ、いや、その、何も……」

対向のテクサナは言うまでもなく至上の緊張状態で、彼女の目にもそれは明らか。見ていて痛々しくなる程だ。

「みなさんは色々おっしゃいますが、そんなに気になさらないでいいんですよ？」

「あ、は、はいっ」

「パミュさんが疑問を持つことは当然であり、魔法を使うものとして大切なことです」

彼女は彼の緊張の原因をパミュの追試のことだろうと思い、柔らかな語調で言葉をかける。同僚からは厳しいことで有名な彼女、いつもならここで驚くべきだが、今の彼には、そんな反応をする余裕などない。

「ええ、それは、私もわかっています」

今の彼には、先を予想する余裕もなかった。

「ではなぜ、そんなに……？」

「え、あ……」

沈黙は、テクサナの表情を陰しくするばかりである。

見かねたミカリヌーエは、待つことをやめた。

「できれば、テクサナ先生の口からおっしゃっていただきたいのですが」

「あ、えっと、いや……」

「——仕方ありませんね」

どうも釈然としない彼に、ミカリヌーエはやむを得ず、眼鏡の奥に隠していた鋭い眼光を取り戻した。

三十代前半の若さにして彼女が教務主任を務めうるのは、単純に長けた魔法能力のためではない。

「——。あらあら。そのことでしたか。」

「……………、……はい。その、ことです」

テクサナはミカリヌーエの突然の納得に、頷いたのか、項垂れたのか。とにかく頭を垂れている。

(しばらくは目も合わせてもらえないかも知れないわ)

彼女は彼女で溜息をつきながら、及ばぬかも知れない努力を始める。彼のための努力を。

「セフィリルさんのおっしゃる通り、私も知っていました。ですから、気にしないでいいんですよ？」

「はい……。わかってはいるんですが……」

「では、そのことはさておきまして。たとえどんな事情であろうと、追試での不正は許されません」

「それはもちろん。決してしません」

即座に顔を上げて、彼はキッと視線を返す。

レンズの向こうはその強い反応に少々驚くとともに、安心もした。再び口を付けたカップの、焦げ茶色の水面に、穏やかな瞳が映っている。

「よろしいでしょう。まあ、彼女の能力と努力に疑う余地はありません。私がこんなことを言うのも何ですが、多少なら、構

わないでしよう」

「えっ……？」

今度はテクサナが、まさかの反応に驚く番だった。

厳格なミカリヌーエが、便宜の計らいを認めるなどあり得ないはず。しかし、それが今、現実に起きている。彼の目の見開きようと云ったら、この世の終わりでも見たかのようにうだ。

「ほら、私の気が変わらぬうちに行きなさい」

呆気に取られている彼に、猫でも追い払うかのように彼女は手を振っている。

「はいっ。それでは、また、明日。お疲れさまでしたっ」

何を考えているかはさっぱりわからないが、テクサナにとっては驚喜の沙汰。パミュの追試には少なからず不安もあったが、もはや払拭されたも同然である。よくわからないが、彼女の気が変わらぬうちと、すくくと立ち上がって退席した。

スキップでもしそうな勢いで出て行く彼を、彼女は穏やかに見送った。しかしその微笑みの半分が自嘲であることなど、彼には知りようもなかっただろう。

「パミュさんのこと、言えないわね」

後れ毛を指で弄びながら、飲みかけのコーヒーに向かって呟いた。

「試験時間は二時間、人間界に降りた後、ある少女に魔法をかけてもらう」

翌日の晩、パミュの追試が始まっていた。

それでもやはり可否の行方に気を揉み頭痛気味のテクサナに對し、当の本人は全く緊張感なし。

「なーんだ、簡単そうだね」

あっけらかんとした声の主は、くてーっと机に上体を預けきっている。

追試など誰も受けたいものではないし、ましてや技術的に不安のない彼女なら、この態度もあり得ると言ったところか。テクサナにとっても下手に緊張されるよりはよかったが、一応、彼とて先生である。

「ああ、簡単だ。が、その態度は何とかならないのか？」

「いいじゃない。あたしとテクサナしかいないんだもん」

「よくない。今は授業中も同然なんだから」

そう、彼は先生で、彼女は生徒。けれども、二人きりの時にテクサナがこんな態度を取ったことがあるうか。いつもなにかんで「二人きりらしく」なってしまう。なのに今日はなぜだろう。

不思議を感じたパミュは少し、探ってみることに。

「んー、今日のテクサナ、なんか変だよ？」

「へ、変なんかじゃない。パミュが合格できるか心配なだけだよ」

相変わらず伸びた状態でパミュが指摘すると、教壇の上のテクサナは軽く視線を外す。

(やっぱりなんかあるー)

何か、隠している。彼女はあっさり気付いたけれど、彼がせっかくなにか隠しているのだ。気付かないふりをしてあげようと、彼女は体勢を変えずにだらーっと応答することにした。

「そうだねー、テクサナが意地悪な問題出さなければ、合格するー」

「意地悪なんかしたことないぞ？ まあ、とにかく。では内容を説明する」

「はい」

ここからはさすがに、パミュも起き上がってまじめに聞き始めた。試験に備えて着込んだコートのぬくぬくが、彼女のやる気を削り、眠気をてんこ盛りにしていたけども。

「パミュはある家の勝手口前に転送する。その家の三女、シンデレラという名の女の子を舞踏会に行かせて欲しい」

「あ、ホントに簡単だねっ。楽勝楽勝っ」

「ああ、難しいことはない。あとは現場で出る指示書に記載された、特別条項を満たすだけだ」

「えー、今嘘ついたー。それがいつも難しいんだよ」

「大丈夫、今回はそんなに不幸なものでもないから」

「そうですか。私はそんなに甘く設定したつもりありませんけど」

突然の声は教室の入り口から。

「あ、ミカリンっ」

「み、みかりぬーえせんせ……」

「なぜ驚くのですか？ テクサナ先生」

「いや、まさか、いらっしやるとは……」

確かに来てもおかしくないが、今のテクサナには少々決まりの悪いシーンなのだ。いくら彼女が暗に認めたとは言え、公正であるべき試験なのだから。

そこまで見通してか、ミカリヌーエは彼に構うことなく、パミュと話し出した。

「生徒の実地試験で見送らなかったことなどありませんよ。ねえ？ パミュさん」

「うん、ミカリンはいつもいるよね。誰かさんと違って仕事熱心だからさー」

「ちょ、な、何を」

テクサナは手をぶんぶんと振りながら否定しようとしたが、二人はあっさり流す。

「そういうことです。とにかくパミュさん、今回不合格となれば退学にせざるを得ません。それだけはわかってください」

「はいっ。んー、テクサナが意地悪じゃなければ、合格します」

「いやだから僕は」

テクサナはもう一度否定しようとしたけれども、二人はあっさり無視。

「なら、きつと大丈夫でしょう。では、行ってらっしゃい」

「はい、行ってきます」

「ほら、テクサナ先生。とっとと転送してあげなさい」

「あ、はいっ。じゃあ、パミュ、頼むぞ」

「はいはい、任せといてっ」

なんだか自分の立場が寂しくなったところで、テクサナは試

験を開始させる。

安請け合いとでも言えそうな軽い挨拶に多少の不安を覚えながらも、立ち上がったパミュの周りに魔法陣を生成。試験のスタート地点へと彼女を送り込んだ。

「……頼むぞ、パミュ」

パミュのいなくなった跡を見て、テクサナは独り言を言ったつもりだったが。

「彼女はわかっていますよ、あなたの気持ち」

すぐ近くにいることを忘れていたミカリヌーエから、存外優しい言葉が返ってきた。

「さっすがテクサナ、ぴったりね。さて、まずは状況調査だけど……」

対象「シンデレラ」が住んでいるらしい屋敷の裏に転送されたパミュは、独り言を言う程度には悩んだが。

「寒い嫌だし、本人に聞くのが一番ね。入る入ろー」

あっさりと解決してしまうのは彼女らしい。

とても試験中とは思えぬ明るい笑顔のまま、テクサナが描いたものと同様の魔法陣を展開して、勝手口を開けることなく屋敷の中に入り込んだ。

一方、パミュが試験へと出かけた教室では、テクサナとミカリヌーエが、生徒のように机に座っていた。

「いつ見ても、見事なものですね」

彼女は感嘆の声を上げながら、パミュの映し出された黒板を

眺めている。

試験官である先生には、試験中の生徒をモニタすることが許されていた。しかし実際にモニタするものは少ない。できるものが少ないのだ。

「いえ、お褒めいただく程のものでも」

「ミリオーダーで転送先を決められるのは、本校であなた以外におりません。遠隔地のモニタも、掌サイズでやっと映し出せるのが二名。誰も及びませんよ」

合否判定は校外のシステムで行われるため、先生がモニタする必要はない。しかし生徒を見ていたいと言う先生があるのは当然で、テクサナも幾度か頼まれたことがあった。

それがいつもタイミング悪くパミュの試験と重なっていたため、彼女のモニタをするのは今日が初めて。見たがる先生がいるのも当然だあと、彼は頬を緩めてパミュの姿を追っている。

隣で同じく、柔らかな面持ちでいたミカリヌーエだが、ふと思いついたように真剣な顔に戻すと、小さな声で言い放った。

「けれどもこれはこれで、嫌な能力かも知れませんがね。いつでもどこでも、彼女を見張れるわけですから」

「……あ、そうですね」

「あらあら、気付かなかったのですか？ 羨ましい……。私はいつも、自分の能力に負けそうです」

彼女は昨日も見せた穏やかな微笑みを浮かべながら、結ばれた髪も揺らさず、ゆっくりと席を立った。

「では、職員室に戻ります。私がいては困ることもあるでしょうから」

「えっ、あ、いや、そんなことは」

「そういうことにしておいてあげましょう」

テクサナにはまだしっくり来ない優しい声を残して、彼女は開け放たれたドアから外へと出て行った。

教室に一人残されたテクサナは、パミュを追い続けている。

彼女にあわせ試験問題に多少の手は入れたが、バレてもさして問題のないレベルだろう。彼女が合格できるかという点も、そのために手を入れたのだから問題はないはずだ。しかし試験が終わった後、つまりパミュの魔法が後に及ぼす影響は、少し心配だった。

「それも対策は打つ。大丈夫だ」

組んだ手で額を支えながら、机に向かって強く言った。それはもちろん、自分に言い聞かせるだけのものではあったが。

「どんな対策を打つのでしょうか？」

ふと顔を上げると、ドアの前にセフィリルが立っている。

「指示書を改竄したことは存じております。舞踏会の最中に裸にするのは可哀相ですものね。魔法を切らす前に帰ることを命じるのは、女の子相手に賢明と判断いたしますわ」

照度不足の蛍光灯に照らされた彼女の肌は、透き通るような白。今はそれが、生気を感じさせず恐ろしい。テクサナは反射的に身構える。

「……なぜ、ここに」

「はぁ……。そんな怖い目で見ないでください。たまたま、ですよ」

血の気のない白い脚を揺らし、ひたひたと迫り来る。彼の目にはそう見えていたが、彼女にそんな意図はあるのだろうか。

少なくとも動作は、いつも通りにたおやかに歩いて、話し相手に近づいているだけである。

「お隣、失礼いたします」

「あ、ああ」

左に座ったセフィリルは上体を捻り、椅子の端に両手を突いて彼を見つめる。その動作は流れるようで、不自然に見えない不自然さがあった。

迫り出してきた腰つきにふと目をやるも、露わな雪白の太腿から意識的に視線を外すことになり、彼は彼で不自然さを増すばかりだ。

「そう堅くならないでください。先生は、私のことがお嫌いですか」

「そういうわけではないが……」

テクサナは穏やかな声の主を視界の端に収めるのがやっとで、無意識に腰が引けている。焦りと恐れが混じった声、その理由のどれだけが改竄の指摘によるものだろうか。

教室は少しばかりの異常事態に陥っていたが、黒板には変わらず、パミュの姿が映し出されている。

「私のこと、あまり信用されていないのでしょうか」

「いや、そんな、ごめん。でも、その……」

「そんなに気が小さくては、不正などうまくいきませんよ？」

「……………」

「確かに見込んでらっしゃる通り、指示書の改竄程度、大した

問題ではないでしょうか」

彼女が言葉を切ると、鞆から抜かれた婀娜な声が彼への侵蝕を始めた。

「もう一つの不正が明るみに出れば、いかがでしょう」

「っ……」

「今のは仮に、という話ですよ？　ねえ？」

彼女は身体を前方に傾け、彼ににじり寄る。じわり、じわりと。焦らすかのように。

「あ、ああ……」

瞳は蛇のようで、見たものの心を捕らえて放さなかった。てらつく肌の蠢きが、テクサナの思考を滾らせる。

「先生は賢明ですわ」

「——っ！」

白く冷たい腕がテクサナの身体を絡め取り、みっしりと豊かな温みが下腹部に乗る。

ブラウス越しに透ける薄紅色の下着は、獲物を喰らわんと舌なめずりしているかのようだ。

「ふふっ、初めてでしょう？　パミュさんの身体では、こうはまいりませんものね」

にゅうっと海老反り、頤を上げ、セフィリルは下から濡れた瞳で見上げる。ついにはテクサナの思考を噛み殺し、嚥下した。

「あらっ？　おとなしいと思ったら、お喜びでしたのね」

ひんやりとした触手が、ぞろりと彼の腰を這う。熱い身体に鮮烈な違和感が蠢動する。

「っ……う」

セフィリルの柔球を突き刺す熱塊を、滑^{なめ}るよう掠めた。

強く閉じられたテクサナの脛の下には、涙が浮かんでいる。横目に映る黒板では、パミュがどこかを走っている。

（そんなことだろうとは思いましたけどね）

打たせた楔を肉溪から抜かんと、彼女はぬらりと反り昇る。

同時に両腕で後頭部を引き下げ、彼の唇を吸い寄せた。

「んふっう」

「——」

数秒後、いつものセフィリルが、彼の隣には座っていた。

「これでパミュは、退学にならずに済みますね」

その姿に余韻は感じられないが、一方のテクサナはそうもいかない。まともに答えられず、ぼーっとしている。

「ねえ、先生？　誰もが、不幸の後に幸せを得られると思いますか？」

彼女はじっと、黒板を見ながら問うた。

そして、彼女自身が答えた。

「パミュは、そう信じています。私は信じられませんが」
彼の視界に映るパミュの前を、セフィリルが横切った。

「では、さようなら、先生」

「あたしの実力を持ってすれば当然合格だよー」

一週間後、パミュは追試前と同様、二人だけの教室で合格通知を受け取った。

通知書を片手で揺らしながら、ひらひらとスカートをためかせている。

「……そうだな」

対してテクサナは、パミュをとりあえず見守っているという風だ。後ろの教壇に寄り掛かり、何とはなしに躍るパミュを目で追う。

そんな気のない返事に気付かぬパミュではない。二歩、三歩とステップを踏んだ後、くるっとターン。ぷーっと頬を膨らませて言い返している。

「あ、今なんか、間があったよね？」

「ないない、ないってば。そりやもうパミュにかかればこの程度の試験なんてねえ？」

「んー、なんか引っかけかなあ」

「全然そんなことないって」

テクサナは否定するが、その視線は少し外れている。

（あたしの目を見てない。根性なしっ）

パミュは不満と満足を少しずつ混ぜて、そっぽを向いて講釈した。

「ま、あたしの華麗な任務遂行ぶりを見れば、合格を危ぶむ人はいないよねー」

「ああ、相変わらず完璧だったよ」

「んーむ、やっぱりなんか、心がこもってない気がするよ？」

「そんなことない。全然ない。心から思ってる」

「そう？ ま、いいか」

パミュを誤魔化せたとはいえないが、今のテクサナにはこれ以上の対処法が見あたらなかった。あまり話しているとボロが出そうなので、早々に切り上げようと教壇の上の書類に手をつけたが。

一番前の机にびよんと跳ね腰掛けたパミュが、テクサナのような口調で話し出した。

「でもさ、あたしの合格は、彼女の失恋と引き替え。あんまり喜ぶ気にはなれないかな」

「合格したんだから素直に喜べばいいと思うけど」

「テクサナって案外冷たいよね」

「そんなことないって。彼女はこれから、幸せになるんだから」
虚空を睨みながら、彼女は自身の膝を上げ、抱えている。

いつもなら目のやり場に困るテクサナだが、今日はそこに構っていないようだ。

「どうかなあ。幸せにはなって欲しいけど、誰もが幸せになれるわけじゃないと思う」

「……そうかな？」

彼女はまだ経験が浅い。それほど多くの物事を見てきたわけではない。それにもかかわらず、人は、自分たちも、幸せな結果ばかりを迎えているとは思えなかった。今回の試験だって。

「うん……。なんでさ、あたしは人を不幸にする存在なんだろう？」

彼は彼女よりは経験がある。だから、彼女の言うことが誤っ

ていないことを、残念ながらわかっていた。けれども彼は、彼女の隣に座った。

「それは」

「はいはい。ドーせまた、先生っぽいこと言うんでしょ？」

「でも本当のことだし……。しかも僕は先生だし……」

「そこが冷たいの。あたしは同じ魔法使いなら、幸せのために魔法を使いたい」

「僕たちの魔法は、幸せのためだよ」

「そうだよ、幸せとバランスを取るための、不幸を起こす魔法。大っ嫌い」

「でも」

「はいはい、もう黙っててば。しないと嫌いになっちゃうよ？」

パミュは形のよい頭を動かし、顔をテクサナに向けた。抱えた膝の上からはりと落ちる髪が愛らしい。テクサナは頬が緩みそうになった。

「わかった、よ……」

彼女は時々、自分のことを嫌う。そのたびに彼は誤魔化しあやしてきたが、そろそろ限界なのかも知れない。

「ねえ？」

今まで聞いたよりも甘い声。

次の瞬間、ぴよんと机から跳ね降りて、ひよいとテクサナの膝の上に乗る。それはいつも通りのパミュ。

「あたしたちにも、幸せのバランスはあるんだよね？」

「あるよ。僕たちを専門とする魔法使いがいるから」

「そっか。なら、ひょっとして、明日はテクサナと一緒にいられないかも知れないね」

初めてだった。彼女がテクサナとの関係を、不安に思うことは。

どんなことがあってもテクサナと一緒に。そう疑っていない子ども、彼は思っていた。けれども実際には違ったのだろうか。少し見開いてしまったかも知れない目を隠せぬまま、彼は答えた。

膝の上の彼女はその表情を見ることはできないが、気付いたのだろうか。

「そ、そんなことはないよ。僕は絶対、パミュと一緒にいる」

「テクサナがあたしを嫌いになるかも知れない」

「絶対にない、僕はパミュがずっと好きだよ」

「あたしを嫌いにならなくても、あたしより好きな人ができるかも知れない」

「パミュはずっと僕が一番。絶対に、ずっと」

「……あはっ、あんまり強調されると却って嘘くさいよ？」

「そんなことないって」

パミュの戯けようには、何となく元気がない。

まさか——。テクサナには一つ、後ろめたいことがある。けれどもあれは、どうしようもなかった。彼になせる最善の選択であったことは、間違いないはずだ。が。パミュが元気を失うには、十二分な理由。まさか、知れているはずは。

下手をすれば沈黙が訪れようとしたその時、廊下から凜とした声が響いた。

「その慌てようが、嘘くさいと言われるのですよ?」

「あ、ミカリンっ。こんにちはー」

「っ、お、おいつ、パミュ、降りろ」

「やだよー。あたしはずっと一番なんでしょ? なら、ずっと

特等席にいるー」

「あらあら、テクサナ先生には後で指導が必要なようですネ?」

ミカリヌーエは二人のやりとりを見ながら、組んだ腕を解き教室に入ってきた。

「ですネー。あたしを降ろそうとするなんてダメダメ」

「パミュさんは厳しいですね。でも、今日は少し、彼を褒めたくなるかも知れませんか?」

「ふえ? どうして?」

「……あのなあ、疑問に思うことはないだろ」

「はい、これ、今日の新聞。人間界のものです」

テクサナの言葉に耳も貸さぬパミュに、ミカリヌーエは折りたたまれたそれを手渡した。

「新聞? なんて?」

パミュが不思議そうに、新聞の上下を正し、開くと。

— 後の名はシンデレラ。王子、十万の市民から見いだす

「嘘っ? なんて?」

「記事にある通り、ガラスの靴が決め手だったそうですよ」

「え? どうして? あたしの魔法はちゃんと時限だったよ?」

シンデレラの衣装は全て、魔法を使いパミュが用意をした。

それは試験問題の指示通り、十二時五分に消滅するよう細工をしたものだった。けれども、新聞によれば、その一部が現存しているらしい。

見出しの下には、確かにパミュが生成した靴が映っている。

「どうしてでしょうねえ。履いている靴を入れ替えるなんて、普通じゃできませんよね?」

ミカリヌーエがわざとらしくそっぽを向くと、飾り気のない一本結びのしっぽが揺れる。

「……あーっ! もしかしてテクサナ? テクサナがやってくれたの?」

彼女は膝の上で跳ねながら、首を反らしてテクサナを見た。

「い、いや、その、まあ、世の中魔法使いなんていっぱいいるしな」

その視線が少々眩しいとでも言わんばかりに、彼も首を反らして顔を隠した。

「あー、絶対そうだ。照れてるもん、顔赤いもんっ」

「さ、さあなあ? ミカリヌーエ先生かも知れないだろ?」

「違うもんっ、ミカリンはこーゆーの苦手だもん。ねえ?」

「そうですね。私も万能ではありませんから」

「ほうらー。テクサナえらい。じゃあ、ご褒美にキスしたげるー」

「バ、バカっ、先生が見てるだろっ」

「じゃあミカリン見てねっ」

居たたまらない恥ずかしさに、テクサナは規律にうるさいは

ずのミカリヌーエを引き合いに出すが、そもそも、二人の関係をよく知っているのは彼女。恋するパミュに「はい」と背中では返事をしながら、教室を出て行った。

「ダメだって、こらっ、パミュっ」

「ぶー。なんでよー。『パミュは僕が一番』って言ってくれたのにー」

「そ、そういう問題じゃ、ないんだよ」

「あっそ。あーもーいいんだ。あたし怒った」

二人きりに戻った教室で、膝の上のパミュは制服のポケットに手をやり、白色のそれを取り出した。

――携帯電話。

――ディスプレイにはセフィリルと、テクサナ。

「……っ！　そ、それ……」

「リルからメールしてもらったの」

「いや、それは違う、違うんだよ」

「ねえ？　リルとあたし、どっちが好きなの？」

「そ、それは、パミュだよ。パミュに決まってるって」

「むう？　今ちょっと、間がなかったあ？」

「ないない。パミュ、僕はパミュが好き！」

テクサナの顔は青ざめていたが、意外にもパミュは。膝の上で幸せそうに、髪をびよこびよこ揺らしていた。

そんな彼女を、いつも通りと表すのは少し違うかも知れない。

「……あった。絶対にあった。どーせリルの感触とか思い出していたんでしょー？」

「そ、そんなこ」

「エッチ。スケベ。変態。……なによっ、どーせあたしはべったんこですよっ」

「そんなことな、くはないけど、いや、違う、違うよ、パミュ可愛いって」

「リルより？」

「うん、可愛い」

「なら、リルより可愛がってよね？」

その上目遣いには少しだけ、彼を惑わす光が灯っている。

「わかったよ、な？　だから、機嫌直してくれよ？」

「……ふふっ、やたーっ。合格のご褒美も兼ねて、今日こそ抱いてね♡　テ・ク・サ・ナ・っ」

「ちょ、ばみゅ、だ、だめだよこんなところで」

身体を捻りテクサナに覆い被さったパミュは、妙に慣れた手つきでワイシャツのボタンを外し始めた。

「あらまあ、予想以上にめでたしめでたし、ですわね」

壁一枚隔てた廊下には、出て行ったはずのミカリヌーエと、遅れてきたセフィリル。

「そうね」

ミカリヌーエは強い眼差しを眼鏡の奥にしまい、後れ毛は風に揺れている。

「あらあらあ？　ミカリン先生？　妬いてますう？」

セフィリルは整った笑顔を浮かべ、まっすぐな黒髪を指で梳く。

「な、何を言ってるんですかっ」

「私の役、先生に譲ってあげてもよかったんですけどねえ」

「えっ？」

「でも、片想いのファーストキスじゃ、いくら何でも可哀相かなと思いますて」

「べべ、べっ、別に私は」

「私たちの魔法は、幸せまでのトンネルを造るもの。その唇、暫しお預かりいたします」

彼女の恥ずかしがる姿はよく似合うのだろうと思いながら、セフィリルは前だけを見て歩き出した。臍を隠すスカートはかすかに揺らし、穏やかに。

「え、あ、あのね？ セフィリルさん？ もう一度言いますが私は」

逃がしませんがでも言わんばかり、でもなかるうが。セフィリルの後を、真っ赤になったミカリヌーエが追った。

「はいはい、私たちは次の恋でも探しに行きましょう」

「ちょ、ちょっと、別に初めてなんかじゃあっ」

シンデレラが再び純白のドレスに袖を通した頃、彼女たちはそれぞれの、ありふれた日常を送っていた。

締め切り前^{なんてないよ}の呻き

川鵜鶏肋

タイトルは“灰かけ女”ぐらいの意味です。そのように解釈してください。

某アニメの禁じ手無しの神展開に大受けしていた頃、さらに趣味に走った展開を想像していた時のノリがこのお話の根底には流れています。そのへんの成分を再利用する形でシンデレラに組み込んでみると、気がついてみればミッシングリンクがどんどん埋まっていき、なんかつじつまが合ってしまいました。実に不思議な感じがします。

Lagado

数カ月前、夢に「銅鐸」が登場した。何の託宣だかさっぱり分らない。

<http://www.k3.dion.ne.jp/~lagado/>

倉崎天一

今回は合同同人企画に誘われながら、直前まで肺炎でダウンという情けない状況で、大変ご迷惑をおかけしました（ペコペコ）。ドレス姿のイラストは制作をフルカラーで行いましたので、ブログにカラー版でも載せようかと思います。イラストが気に入っていただけたら、チラリと覗きに來てください。

今回はお誘いいただき本当にありがとうございました。

http://blogs.yahoo.co.jp/kazenowa_n/

Fukapon

工期ないのに書き方変えて不安定だったりするのは、ほら、そーゆーお年頃だから♡ あはっ。

誰？ って聞かれたらミカリヌーエって答えちゃう今日この頃、ロリが泣くよ。でもね、純白が似合うのは彼女だと思うんだ。

<http://www.fukapon.com/>

なぎ

皆様大変申し訳ありませんでした。原稿を落としました。

ご迷惑をおかけしました。通常の締め切りに間に合わず、特別に設定していただいた締め切りも守ることができず、本当に申し訳ありません。次回このような企画があり、参加させていただけるとのことでしたら、ぜひ参加させていただけたらと思っております。

レイアウト

project KAIGO dAMESOp PRIVATEER: 予定通り当日作業だ！ メモリ増設で安心。

印刷・製本

project KAIGO 東川口分室: 予定通り当日作業だ！ 紙折機で安心。ステーブルは手動か…

<http://www.projectkaigo.org/>

mnfikmyhk
CREATURE MIXING 1
Cinderella

2008年 5 月25日 初版発行

発行所 まにふいくみやはか
印刷／製本 project KAIGO東川口分室

Copyright(C) 2008 川鶴鶏肋, Lagado, 倉崎天一, Fukapon, なぎ, まにふいくみやはか

この本は Creative Commons「表示 2.1 日本」ライセンスに従い頒布されます。
詳細は <http://creativecommons.org/licenses/by/2.1/jp/> をご覧ください。